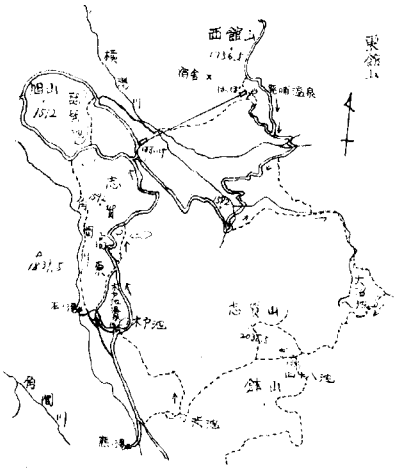
6）．志賀第二熔岩などであり，その他今の志賀山の噴出物であるデトリタンなども含まれる。池廻りのコースは，地図を参照されたい。大沼池は標高１６９７ｍで，土の色は橙色を帯びていた。四十八池の付近は標高１８９０ｍで，大小沢山の池沼が散在している。湿地帯なので，珍しい植物がいくつか見られた。熊野湯温泉の小高い展望台から，志賀高原の地形や熔岩の状態などを観察した。

最後の日，分担項目を中心に，各自が自由に調査を行なった。　（２年　上田　記）



志賀高原略図

第２学年

彦根・奈良巡検　（渡辺・正井教官）

昭和４３年１０月１０日～１３日

〔第一日〕　彦　　根

彦根城のある高台に登って，彦根の位置を確めることから本巡検は始った。琵琶湖のある近江盆地は，東は伊吹・鈴鹿の開析の進んだ断層崖で，琵琶湖との間に湖東平野をつくっている。西は比良の断層崖が湖岸にせまっており，又北も急で，敦賀湾から柳瀬を通って余呉湖に至る柳瀬断層がある。
彦根は湖東平野にあって，湖北・湖南の境となる中央部分に位置している。

地勢観察の後，市内を見学した。市街は井伊氏３５万石の城下町で，戦災を免れて，今なお城下町的景観を残している。城を中心にして東南は家臣の武家屋敷で，西南は寺町である。寺町と城の堀との間には，町屋が残っている。町屋には，〃うだつ〃（防火用の屋外につきでた壁）や格子戸などがみられた。道は原則的には真すぐであるが，外敵の侵入を考慮して鍵手型やゆるやかなカーブの道路が要所要所に設けられている。商店街には，市場商店街，中央街，最近できた新商店街があるが，彦根の特徴としては，駅前の商店街より，町屋の方のそれが繁華街と呼ぶにふさわしいところとなっていることで，駅の吸引力が小さいことを示している。

人口は昭和４３年統計で，７．４万人であり，その変化は少しずつであるが増加の傾向にある。

産業別人口は，第１次２２％，第２次３６％，第３次４１％で，工業の比率が高く，繊維工業，機械工業や東部カルスト山地に原料をあおぐセメント工業が行われている。

明治以後，発達の遅れている彦根ではあるが，近年，名神高速道路の開通に伴って，通路にあたる原

合併して市制を施いたものである。その背後には，天理教の組織の発展，全国的拡大が在る。ここでは，都市計画とは即ち，天理教会の諸施設の拡張であって，それにあわせて将来の駅の移転問題なども考えられている程，政・教一致的である。

現在の人口は約６万であるが，ほぼ同人口の彦根市が，京阪の衛星都市としてのみ発展し得るのに比べ，天理市は，宗教色の強い都市として独自の道を歩もうとしている。（３年．日比野・細井記）

第２学年　　長野県鬼無里村及び松代　（浅海教官）

（３年次実施）

昭和４４年８月２８日　松　　代

２９日　鬼無里村地すべり地

３０日　現地解散

長野県上水内部鬼無里村へ，山村および地すべり地調査を主な目的とする巡検を行った。松代では，昭和４１年頃，新聞紙上をにぎわした地震頻発地帯の地形を観察したが，時間の関係で詳しくは調べられなかったので，鬼無里村について報告する。

１．概　　況

鬼無里村は，現在人口約４０００人の過疎になやむ山村である。５年前には人口約６０００人くらいであったが，毎年減りつづけたため，現在では５年前の約$\frac{2}{3}$ほどになってしまった。今でも年に２００人くらいずつ人口が流出している。村は山間の小平担地および傾斜地に立地しているために，機械化，大農化が不可能である。農業の大きな発展ものぞめない。農家の約$\frac{2}{3}$は兼業農家である。経営は，畑作の商品作物であるホップ，タバコと，養蚕，酪農から成っている。しかし，山地の緩傾斜地を部分的にたがやす畑作では収入が少ないので，村内の林業，道路工事などに，日雇いで働きに出る人も多い。要するに，山地内の農業の生産性の低さが，この村の過疎をひきおこす一つの理由になっているようだ。村では開発計画として長野――鬼無里間の道路開発，戸隠への峠の頂上にある品沢などの観光開発をあげている。

２．鬼無里村の地すべり

地すべりには，急激な土地の崩壊によりおこるものと，急な崩壊はなく除々に永続的に土地が移動しておこるものとがあるが，鬼無里村には，この二つのタイプの地すべり地帯が，１０カ所余り存在する。

現地ではこれらの地すべりの地点を実際に観察しながら，原因や対策などを考察した。

地すべりの自然的要因については尾原説などの説があるが，一般的には地下水，地質構造，地形，気候条件，人為的条件などがもとになっておきる。日本の地すべり地帯をみてみると，地形地質的に地すべりがおきているのは，第三紀層の地帯，断層破砕帯の地帯，火山地帯であり，鬼無里村は第三紀層の